



地域ぐるみの療養を支える

在宅で迎える天寿を

2012年は団塊の世代との推計を厚生労働省が示が65歳以上の高齢者の仲間入りをした。10年後には後期高齢者となる。

このまま現状を放置すれば、2030年までに約47万人が「死に場所」を失う

という。病院や介護施設、そして自宅で看取ることができる数には限界があるからだ。

2013年はそれ

が問われる年といえる。国療養支援診療所や訪問看護は「包括ケアシステム」という新たな暮らしの支え方を示している。24時間の切れ目ない見守りと居場所の提供が基本となる。人口約1万人規模の地域を一つの

実現するためには医療側は外来患者数が減少することや、多職種によるチーム医療が必要になることを自覚しなければならない。

単位として、医療、介護、福祉そして行政などのあらゆる資源が連携、協働しチームとなって展開していくことを目指す。

一方住民側にも、病気を病院だけで徹底的に治すというこれまでの医療への姿勢を見つめ直し、長寿から天寿へという意識変革が求められる。

その中核となるのが「新生在宅医療」である。かか

患者さんまで、家族に負担をかけることなく住み慣れた地域で過ごせる社会を目指したい。